

創建

そうこん

2017・3・25 VOL.51 NO.4 (通巻162号)

巻頭言：出村克宣・1
 アカシア教育山脈(上)：永田 進・2～3
 ネットワークOB&OG⑩：横尾 聡・4～5
 ネットワークOB&OG⑪：若林克友、美緒・6～7
 博士(工学)学位論文・8
 工学部の思い出・9
 修士学位論文発表会／卒業研究発表会・10
 卒業設計作品展・11
 卒業式・修了式の表彰者／教室ニュース・12
 ■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

私はある付属高校のSSHクラスの運営指導員をしていて、高校3年生が約3年間をかけた研究の成果を英語で発表する研究発表会に参加しました。それまでも何回かの発表会、ポスター展示などを行っていますが、英語での発表会とあって生徒たちもかなりの練習を重ねました。発表の1週間前には、北海道在住のSSH運営指導員が発表を指導し、大学に在籍する留学生が英語による質疑応答の練習に加わったと聞かされました。国際会議に参加したつもりで質問してみると、回答に戸惑う場面もありました。そんな時は英語で、「あなたは・・・と発表したでしょう。私はそのことについて・・・と思うのですが、YesですかNoですか？」と質問した。すると、Yes・Noの明快な回答が返ってきた。これは国際会議の場で海外の研究者が助けてくれた質疑応答の方法である。研究発表会を終えて、生徒たちには充実感がみなぎっていた。その充実感・成功体験が若者を成長させることになる。その後の会議で、「高校生のプレゼンテーションはすばらしいもので、一週間前の生徒とは思えない成長ぶり」と話題になった。

そのような成長は、環境に大きく依存するといわれます。宮竹貴久著『先送り』は生物学的に正しい一究極の生き残る技術(講談社)には、〈最近の進化生物学研究の成果が示すのは、「遺伝だけでは生物の運命は決まらない」という事実である。これは「表現型の可塑性」と呼ばれる〉と記されており、「生物は育った環境により遺伝に修飾が加えられ、遭遇した環境に合うように自分を変化させる。凶形やパターンを認知する能力は30%、文章力は86%、素直かどうかは50%が環境によって決まり、内向きか外向きかは60%近くが育ちに左右される」と記述されています。

このような観点に立てば、将来社会で活躍する学生諸君に対して、教員である私達はこのようなことを考えながら、限られた時間の中で諸君の成長を助ける環境を与えなければならぬと考えています。一方、見方を変えれば、どのような環境に身を置くかによって自分自身の成長の度合いが違ってくるとを意味しているのではないのでしょうか。

先日東京で、電車のドアが開いたにもかかわらず、スマホを覗いている若者がホームに立って降り口をふさいでいました。そして、電車の中では、多くの乗客がスマホの画面を覗いています。私の学生時代の車内とは風景が異なっています。昔は、満員電車で、新聞を小さく折りたたんで読み、腕が他人にぶつからない

大学・社会での学び

教授 出村 克 宣

ように紙面をめくっていました。つまり、折りたたんだ新聞がスマホに替わっただけであって、むしろ、スマホのページをめくる際に他人に迷惑をかけることはありません。ある時「単行本が好きなのは、ページを折ったり線を引いたりできるから」と言ったら、電子書籍の良さを説明されました。かばんに単行本を何冊も入れて持ち歩くことはできない。電子書籍であれば、スマホやタブレットに何百冊も入れて持ち歩ける。マーキング、文字の拡大、語句の検索も可能で、暗い場所でも読書できる。実は、携帯電話を使い、パソコンで原稿を書き、傍らに電子辞書があるにもかかわらず、その良さに気付かないことが時代遅れでした。道具(ツール)は違っても読書という

行為は同じです。又、最近では、初等・中等教育でも情報通信技術(ICT)の導入が進んでいます。そうした環境下では、昔と異なる学習能力も鍛えられるでしょう。講義ノートを取りながらの学習に加えて、プロジェクターで示した内容をスマホで写し、それを利用した新たな学習能力が諸君に芽生えていることを期待しています。

新しいツールでこれまでにない学習能力が備われば、若者は新たな感性を育てていることになると考えています。学生諸君の成長をお手伝いできるような環境を造りあげていきたいと思っていますが、諸君自身も様々な環境の中に身を置いて自分自身を成長させてください。

マルコム・グラッドウェル著「天才!成功する人々の法則」(勝間和代訳)の中に、「一万時間の法則」という記述があります。ある心理学者の調査によれば、世界レベルの技術に達するには、どんな分野でも、1万時間の練習が必要だと記述されています。4年間の学修期間を計算すると、授業は半期(半年)に15回、定期試験に合格し2単位が認定されます。省令では「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準」としています。従って2単位を修めるためには90時間の予習・授業・復習を含む学修が求められているわけです。卒業のためには126単位以上が必要であり、2単位90時間を4年間重ねたとしても5670時間、1万時間に届きません。だから、専門力を備えた一流プロになるための1万時間への到達は卒業後の学修にゆだねることになります。学生諸君は建築を学ぶ大学生として、また卒業後には専門性を備えた社会人として学び続け、成長してほしいと思います。

(工学部長)

アカシア教育山脈(上) —工学部 (建築学科) を支えた校友教員—

土木工学科特任教授 (建築22回) 永田 進

■はじめに

日本大学工学部 (以下工学部) は昭和22年神田・駿河台から専門部工科としてこの郡山の地に移設以来、70年の歴史を刻んで来た。

その間多くの技術者を送り出し我国の産業界に大きな貢献をして来たことは万人が認めるところである。しかしながらその陰にはあまり知られていない大きな特色がある。それは、北は北海道から南は九州・沖縄まで、工業高校を中心に、高校・中学校に多くの優秀な教員を送り出して来たことである。特に平成10年頃までは、全国の工業教員の人数としては全国最多を誇っていた。その後は残念ながらその地位は他大学に譲りはしたが、今日迄各都道府県の工業教育の指導的立場となっている教員は、工学部校友教員の方々である。

さらに、全国工業高等学校長協会理事長を務めた棟方克夫 (工化26回) はじめ工業高校校長職にある校友は、平成26年度は全国最多の14名を数えるに至った。さらに工業高校教育の全国的組織である、各種教育研究会の指導的立場にある校友も多数おられる。

戦後、我国が敗戦から短期間に驚異的復興・発展を成し得てきたのは、中堅技術者の養成を目的に教育を推し進めてきた、工業高校の存在を抜きにしては語ることは出来ない。つまり、今日の産業界の発展は工業高校卒業生の存在があったればこそである。この工業高校教育の中心を担って来た工学部校友教員の果たしてきた役割は、工学部の誇りうる伝統でもある。ここでは建築学科校友を中心に紹介させていただく。

■北海道編

北の大地では昭和40年代頃までは建築学科が設置されている大学は北海道大学をはじめ、1~2校であった。その為、津軽海峡を渡って優秀な高校卒業生が工学部に入学してきた。現在のように、青函トンネル、新幹線もない時代であったので、青函連絡船に乗り、まる2日かけて郡山に来たという話も伺っている。卒業後は、道庁、札幌市役所等、官庁はじめ建設業界に就職し、現在は指導的立場で多くの校友が活躍している。工業高校においては、佐藤宏 (5回)、高崎格 (14回) が永く道内建築教育の指導的立場で活躍した。高崎は伝統校旭川工高、札幌工高で建築科長を務め、多くの生徒を工学部に送り出した。その中で行場義修 (30回)、池原智宏 (38回) も高崎の教え子として道内に戻り、高崎の後継者として工業教員の道に入った。行場は20余年にわたり帯広工高に勤務し、その人柄を慕い多くの教え子が工学部に入学している。又アーチェリー部監督として活躍、多くの生徒を全国大会に送り出してもいる。現在は母校の旭川工高に勤務。池原も旭川工高出身、札幌工高建築科長から道北の名寄産業高校教頭に栄転、将来を宿望されている。この北の大地には、電気工卒の高崎の旭川工高時代の教え子である太田潤一 (電34回) が、伝統校小樽工高校長として次代の北海道工高教育を背負う立場で活躍されている。

■東北編

みちのく青森は伝統校弘前工高に、蒔苗俊規 (30回) が建

築科長、山内剛 (工化34回) は生徒指導主事、甲子園出場経験をもつ滝淵安弘 (38回) が母校野球部監督として伝統校を支えている。弘前工高と並ぶ伝統校青森工高建築科長を最後に退職された大山由紀夫 (29回) は卒業時総長賞を授与され、大学院を修了した。これらの方々毎年トップクラスの生徒を母校に送り出した。その陰には、弘前工・青森工の伝統校の校長として後輩の育成にも熱い思いを寄せた豊島隆幸 (電27回) の存在が大きい。豊島は民間会社を経て母校 (青森工) の教員になり、八戸工・十和田工の教頭を経て校長職に就任。現在、青森県高野連会長、東北地区高野連会長等多くの要職を荷っているが、工学部校友会教員部会 (アカシア教育研究会)、日本大学全国桜師会の青森県支部長としても、後輩の育成に熱い思いで奮闘している。その豊島のもと、青森工の進路指導主事として責任ある立場を担っている津島節 (電36回) の存在も大きい。

日本大学発展の礎を築き、工学部創設の父である元日本大学会頭古田重二良は秋田県出身である。その古田の故郷秋田の旧制中学校からの伝統を誇る横手高校から入学した高橋義則 (12回) は民間会社を経て、郷里の横手工 (現、横手清陵学院中・高) に赴任、大曲工で退職。実験実習を中核とした工業高校教育には高橋のような経歴の教員が、うってつけであった。さらに授業のみならず、秋田県水泳連盟専門委員長や県高体連 (水泳) 専門委員長として秋田県スポーツ界に大きな業績を残された。さらに平成11年に開かれた東日本建築教育研究会・秋田大会には、事務局長として、大会を成功裏に導き、全国から参加した工学部校友教員に大きな感動をもたらした。高橋の最後の勤務校大曲工は、平成28年春の選抜高校野球大会に出場したが、教科の学習だけでなく部活動も奨励し、人間形成を重視した工業高校教育を推進した高橋の思いが結実した一端と思われる。このように高橋は、生徒はもちろん同僚・保護者・同窓生にも慕われ、今も秋田の地から工学部に大きな声援を送っている。

高橋の後継者として今日の秋田県の建築教育を背負っているのは、小林初夫 (30回)、菅原伸一 (34回)、川崎知之 (38回) である。小林は横手工が初赴任地、現在は全国最多の優勝を誇るバスケの名門校であり、母校でもある能代工。菅原は親子2代の日大卒の工高教員。由利工高から母校秋田工に赴任、建築科長として伝統校を支えている。

川崎は北海道でも厳寒の地である名寄工 (現、名寄産業高) が初赴任地。その後郷里に戻り、母校でもある横手清陵学院中・高 (旧横手工) に赴任。同校は全国唯一の中学校を併設した工業系高校である。進学担当・学年主任として母校の重席を担っている。

岩手県の工業教育といえば、花田章 (13回) を抜きにしては語れない。県内の工高勤務の後、県教育委員会入り、ラグビーの名門黒沢尻工高校長を最後に退職。県内の工学部校友教員の多くが花田のお世話になっている。日本大学全国桜師会岩手県支部長も務め、さらに校友会教育部会の前身であるアカシア建築教育研究会の設立には大きな力を注いでいただいた。花田の後継者が鈴木善治 (14回)、菅原克朗 (15回)。鈴木は盛岡工を最後に退職、茶道をたしなみ退職後も盛岡工

に講師として後輩の育成に務めた。菅原は水沢工で、江越純子(27回)は杜陵高で定・通教育振興に貢献され遠野高校を最後に退職。現在は外里昌治(31回)、新里善徳(33回)が盛岡工に。これら建築学科の卒業生の他、盛岡工高校長で退職された川原利夫(機17回)、福岡工高校長を最後に退職された川村正博(土20回)や母校盛岡工で退職された小野寺稔(工化25回)の存在を忘れてはならない。岩手県から毎年多くの学生が入学しているが、花田はじめこれらの先生方の母校への大きな期待が込められているからである。

宮城県は、白石工・県工で教鞭をとられた塚本達夫(17回)の存在が大きい。塚本は長州・山口県から工学部に入学、在学中は応援団に所属。生徒に対する情熱、面倒見の良さは、卒業生の語り草と言われている。

山形県は、わが国の近代建築史の中で光彩を放った3人の偉人を輩出している。一代の碩学・伊東忠太、民間建築家の雄・中条精一郎、耐震構造学の祖・佐野利器である。特に佐野は日本大学高等工学校(日本大学理工学部的前身)初代校長に就任(大正9年)。高等工学校は働きながら工業を学ぼうとする青年技術者のために、夜学とし、修業年限は2年とした。当初は土木・建築科のみであったが翌年機械科が設置。特に建築科は佐野の建築に対する思想を反映して、デザイナーアーキテクトではなく、むしろエンジニア・アーキテクトの養成を目標とする教育方針が打ち出されていった。これが日本大学建築学科の底流となり『構造の日大』が伝統となった。

高橋三郎(3回)は山形工から入学、卒業後は母校一途に建築科長として多くの人材を育成。その山形工からは斉藤敬一郎(23回)、叶内克成(31回)、矢作裕幸(38回)入学、卒業後は郷里の教育に携わった。斉藤は伝統校である新庄農・新庄工を統合した新庄神室産業高の進路指導主事として、統合の苦難を乗り越え立派に新設校を軌道に乗せた。在学中体育会アメフトで活躍した叶内は大学院修了後、母校に勤務し、現在は山形工と並ぶ伝統校米沢工に勤務。後輩の油井敏和(45回)とともに多くの教え子を工学部に送っている。矢作は卒業後日本海に浮ぶ酒田市の飛鳥中学校に赴任、現在は熱き情熱を特別支援教育に捧げ、酒田特別支援学校で奮闘している。油井は米沢工出身で、在学中生徒会長を歴任し、当時の校長阿部孝(電9回)の薫陶を受け工学部に入学。卒業後は酒田工へ赴任、長井工を経て母校の米沢工へ。若さ溢れる情熱を教科指導・部活動に全身であたっている。将来の工業高校を背負う人材である。油井の恩師である阿部は民間会社を経て山形工の教員に。その後教育センター、県教育委員会指導課の指導主事として県下の教員の情報教育や工業教育等の指導にあたられた。さらに米沢工・山形工の校長も歴任。その阿部の後を荷ったのが、酒田工(現、酒田光陵高)から入学、卒業後教職の道に入り母校の校長を最後に退職した菅原伸一(機20回)。鶴岡工を最後に退職し、現在ウガンダで短期大学の設立を政府から要請され、その任に携わっている菅原和明(電26回)である。奇しくも阿部(山形工)、菅原伸(酒田工)、菅原和(鶴岡工)の校長職経験者3名は、山形県の工業教育を支えてきた伝統校の工業高校出身者で母校の校長を最後に退職。

これらの校長先生方がおられたからこそ、ものづくりの工業高校教育として山形県が全国の指導的役割を果たし多くの熱意溢れる工学部校友教員が山形県の教育界を背負っているのである。阿部は大きな業績を残し平成17年永眠された。菅原伸・菅原和は退職後も校友会教育部会を通し、後輩の育成と母校の発展に大きな力をいただいている。そして、その教育部会を通して熱き思いを寄せているのが、阿部英敏(工化

33回)である。阿部は山形工から工業化学科へ入学。卒業後、母校に赴任。以来30余年山形工一途に、伝統校を支えると共に柔道部監督として多くの生徒を全国大会に出場させている。今日教員部会を纏め県内から多くの生徒を母校に送り出しているのは、阿部の存在が大きい。

福島県は工学部の御膝下。多くの校友が県内の学校で活躍している。特に工高建築教育の基盤をつくられたのが、斉藤久志郎(5回)、古橋栄吉(8回)、新井健一郎(11回)、菊田忠(12回)、佐久間和司(14回)、佐久間亨(15回)、馬場彦吉(15回)、関根敬次(16回)の方々である。古橋は附属東北高校(旧、東北工高)一途で退職。建築教員らしく美術の才能に秀でており、大学・学部の刊行物に多くのスケッチを通して協力していただいている。馬場は校友会教員部会発足時大きな貢献をされた。関根は県工業校長会会長も歴任し、福島工高校長を最後に退職。現在も教職課程に出講され後輩の育成に取り組んでいる。校友会教員部会の会長も務め、御膝下福島県支会の設立や山形県の校友が熱心につくりあげた工学部学術研究報告会(教育に関する部会)の盛会を引き継ぐべき平成29年度の最高責任者としてその任を背負い、母校の為に奮闘されている。それら諸先輩の後を継いでいるのが、池上邦彦(32回)である。池上は大学院修了後教職の道に入り、現在郡山北工の建築科長として母校の重責を荷っている。鈴木武(52回)は、会津工を経て震災で大きな影響を受けた勿来工で奮闘している。さらにこの数年、優秀な若手が県内各高校に赴任、大きな期待がかけられている。大木健一(土46回)は、卒業後教職免許状を取得した苦勞人、福島工定時制にて勤労青少年相手に奮闘中。工藤俊喜(60回)はみちのく津軽の弘前工出身。高校時代は生徒会長も経験。諸先輩の姿に憧れ、設計事務所の職を捨てて教職の道へ。先輩でもあり母校の校長でもあった豊島青森工校長の指導も受け、一回の挑戦で見事難関の教職採用に合格、二本松工高に赴任。橋本葵(63回)は郡山北工から入学。在学中は体育会硬式野球部のマネージャーも務め、成績優秀。受験時、教職採用試験の建築部門がなかったため土木で受験、見事合格。これは本人の並々ならぬ努力があったればこそであるが、その陰には、郡山北工時代の担任であり、先輩で、現在の職場の上司である鈴木正美(土31回)の並々ならぬ指導の結果であろう。二本松工高赴任してからも熱心に授業研究・生徒指導にあたり周囲の期待も大きい。その二本松工高は資格取得の松工として工業高格の代表格。その中核には田坂優太(電57回)の存在が大きい。田坂は勿来工出身。民間経験を経て教職の道に、その工高・民間の経験を最大に生かし、熱血漢を生徒にぶつけている。生徒の信頼も絶大で、工藤・橋本もその姿を追っている。その田坂と同期が喜多方桐桜(旧、喜多方工高)に平成28年度採用の樋口広宣(電57回)である。同校校長は渋谷栄一(工化31回)、教頭は佐藤正道(工化36回)である。二人の先輩の下で奮闘中。渋谷は県工教頭職から校長昇格へ、佐藤は会津工に長く勤務、郡山北工から今春教頭へ昇格。福島県の工業教育を背負う期待が御二人には大きい。

これらの校友の陰には勿来工・会津工の校長を歴任した渡邊秀雄(機20回)の存在が大きい。渡邊は民間経験を経て工業教育一途。強い工業高校教育の信念を持ちその推進に全力で向かってこられた。巾広い教育観と研究熱心な姿は多くの尊敬を集めてこられた。現在も教職課程講師として熱心に指導にあたられ、学生からも慕われている。現在県内の校友校長は渋谷一人であるが、それに続く教頭職には前述の佐藤正道の他、荒川俊一(機35回)、山内義美(工化36回)、浅野猛(電37回)、関根毅(電39回)がいる。※敬称略としました。

— 日本大学工学部へのお礼 —



新潟県立上越総合技術高等学校 横尾 聡

○ 自己紹介

私は、昭和55年3月に日本大学工学部建築学科を28回生として卒業しました。大学院修了後は、東京建築専門学校専任教師として9年間勤め、33歳から新潟県立高等学校の建築科教諭をしています。現在は、母校勤務をして13年目であり来年度定年を迎えます。

○ 学生時代の思い出

1年生の思い出は、寮生活と部活動ですね。俊英学寮で一年間過ごしましたが、当時は6畳間を2名で使用し、門限後の22時頃の点呼にいないとすごく怒られ、始末書を書かせられます。若気の至りでチンピラともめて門限に遅れたことがありました。また、今だから言えますが、点呼後に数名で一階の部屋から抜け出した事もありましたね。厳しい生活を共に過ごした同級生には団結心が生まれ、当時の同室者や隣室者とは今でも年賀状のやりとりをしています。

部活動は、合気道部に入部しました。高校時代に柔道二段を取っていた私は柔道部の誘いを受け見学に行ったところ、同じ道場内で袴姿の数十名が宙を舞っていました。柔道で相手を投げるのは至難の業であり、なぜあんなに簡単に人を投げられるのか疑問に思ったからです。その理由は、柔道では禁止されている関節技を使っており、自ら飛ばないと骨が折れてしまうからなのですが、練習、挨拶、上下関係が厳しい部活動でした。1年生の髪型は五分狩り以下の坊主頭（入部前は長髪で五分狩りは人生初でした）とし、校地内で先輩を見かけたら直立不動で挨拶。道場内では練習も含めて4年生とは口はきけず一つ年上の先輩と敬語で話す事しかできません。同学年の一人が挨拶しなかったりすると連帯責任として1年生部員25名位全員が河原等で正座させられました。しかし、文化祭（北桜祭）時の演舞会はすばらしく、4年生がみこしの上に乗って1・2年生が担いで郡山駅前出発のみこしパレード。苦しかったですが見応えがあったと思います。こうして今の私の忍耐力が培われたと感じています。

4年生の思い出は、卒業研究とアルバイトです。3年生の頃から郡山駅前の夜の店でアルバイトをしていた私は、4年生時にスナックの店長を同級生と二人で引き受けました。午後5時頃から仕入れに行き夜中の1時頃まで営業し、片付け後その日の売上金を夜間金庫に預けて

終了となります。一人で毎日行うには無理があったので二人の交代で行いました。

一方、卒研は倉田研究室にお世話になり、私が4年生の時に光春先生が理工学部から来られ、博先生（光春先生の御尊父）とお二人が研究室におられました。卒研のテーマは「有限要素法による回転体シェルの解析」でしたが、全く未知の分野でした。研究室には一日おきにしかな顔をみせず、研究が遅れていたため同級の卒研生が心配してアルバイト先まで来てくれたこともありました。何とか卒業できたのも同級生のおかげであり本当に感謝しています。

当事を思い出すとときりがありませんが、今の私の人格・行動は大学4年間で培われていると思います。たくさんの皆様にご迷惑を掛け、お世話になりました。ありがとうございました。

○ 工学部が元となっている現在の私の職業

高校教師になり26年たちますが、現在新潟県内には建築系学科のある高校は5校あり、1学年6クラス約200名の生徒が学んでいます。建築系学科が設置された年代の古い順に簡単に紹介します。

- ① 県立上越総合技術高等学校（旧高田工業高等学校）：創立100周年を迎え73年前に建築科が設置され、現在建築・デザイン科 建築システムコース30~40名在籍、進学率約50%。
- ② 県立新発田南高等学校：創立99周年を迎え72年前に建築科が設置され、現在建築工学科 建築設計コース約40名在籍、進学率約60%。
- ③ 県立新潟工業高等学校：創立77周年を迎え67年前に建築科が設置され、現在建築科 建築コース40名、建築設備コース40名在籍、進学率約40%。
- ④ 県立新潟県央工業高等学校（旧三条工業高等学校）：創立105周年を迎え20年前に建設工学科が設置され、現在建設工学科 建築コース約20名在籍、進学率約40%。
- ⑤ 県立新津工業高等学校：創立53周年を迎え4年前に日本建築科が設置され、現在日本建築科約30名在籍、進学率約20%。

近年は、高校入試においてくくり募集を行い、2学年に進級するとき科を選択している学校が増えたため人数が学年ごとに多少変化します。

建築科目の単位数や授業内容は、各学校により多少の違いはありますが、最低でも2級建築士受験に必要な科目ごとの単位数を実施しており、2級建築施工管理技術検定学科試験、准1・2・3級建築CAD検定試験、2・3級建築大工技能検定試験、1・2・3級計算技術検定試験等の資格取得にも力を入れています。

また、ものづくり大会や技能五輪大会、各種コンペやコンクールに出場し技術・技能を磨くと共に、キャリアプランニング能力やプレゼンテーション能力向上に向け、インターンシップ・デュアルシステム報告会や課題研究発表会等を実施しています。

これらを実施している教員数は、県全体で教諭21名、実習助手7名、講師4名ですが、近年は毎年教員採用試験を実施していますので、日大工学部卒の学生・院生も挑戦してほしいと願っています。やりがいのある仕事ですよ。

○ 地元上越のアピール

スキー発祥の地である上越市は、積雪量が多く昔は「この下に高田あり」と言われたくらい街が雪に埋もれていました。ですから、冬の通行路として雁木が設けられ総延長では全国一の長さになっています。また、高田公園の夜桜は、日本三大夜桜の一つと言われライトアップされた夜桜と三十櫓のあでやかな景色は見応えあります。さらに、梅前線を桜前線が追い越す地域であるため、梅と桜が同時に咲きます。雪に埋もれた無彩色の景色が、春になると色とりどりの花で色付く四季のはっきりした地域です。

また、水がきれいでお米がおいしいため全国的に有名な日本酒があります。新潟市の越乃寒梅、長岡市の久保田・越乃景虎、村上市のゞ張鶴、南魚沼市の八海山、新発田市の菊水もありますが、上越は雪中梅・吟田川（ちびたがわ）・千代の光・鮎正宗などが広く知られている銘柄でしょうか。これは、海と山に囲まれ平地が少なく、新潟県でも珍しく硬水と軟水のいずれも湧き出る地域であるからとのこと。

近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。



高田公園の夜桜

○ 私と工学部とのつながり

卒業以来10年おきに開催される母校を訪ねる会には3回出席しましたが、それ以外は全くご無沙汰しています。しかし、20年程前に私の恩師である元長岡工業高等学校校長の久保田幸正先生（建築19回卒）から、日本大学工学部校友会教員部会（アカシア教育研究会）を紹介されました。支部は全国に多数ありますが、その新潟県支部総会に出村工学部長、手塚校友会長をはじめ毎年数名の教授からお越しいただき、工学部の現状、新潟県出身の学生の様子、進路等についてお話ししていましたので、大体の様子はわかっていました。

そして、今年度の夏、土木工学科の永田進特任教授から学術研究報告会への参加依頼をいただき、平成28年12月3日（土）に工学部を訪れました。私は、教育に関する部会で発表させていただきましたが、建築学会の最先端学術研究にも触れることができ、大変勉強になりました。また、夜の懇親会には若井正一名誉教授、浅里、濱田、速水、浦部、市岡現建築学科の先生を初め多くの先生方からも出席していただき大盛況でした。このような場に、ベテランから若手まで全国から多くの校友教員が遠い所を参加してくれたことは、工学部の将来にとって大変良いことだと思いました。ありがとうございました。

また、当日の昼休憩時に隣にある武道場へ行ってみました。誰もいませんでしたがドアが開いたので、35年ぶりに合気道部道場を覗いてみました。懐かしい気持ちがこみ上げ、あの頃の様子が頭に浮かびました。壁を見ると、当時は無かったと思われる過去の部員名札を見つけました。まさか私の氏名もあるのかな？と探したところ、今は亡き旧友の氏名と共に私の氏名を見つけました。ここで汗を流したという痕跡が残っていたことに対してとても感動しました。ありがとうございました。

○ 最後に

前述の通り、今日の私があるのは日本大学工学部のおかげであると言っても過言ではなく、本当に先生方や諸先輩方、同級生に感謝しています。また、このたび伝統を誇る卒業生にも懐かしい「創建」の原稿依頼を頂き感謝申し上げます。日大工学部の今後のさらなる発展と在校生のご活躍を祈念申し上げます。



合気道部の部員名札

ネットワークOB & OG ②1

素材に寄添い、うつくしいカタチを求める。

木作家・彫刻家 若林克友 (2002年卒)
若林美緒 (2003年卒)



新興住宅街に育ち、木を組んで家を建てていく大工に憧れた少年時代。自然に近いところで暮らすようになった中学時代、樹は本来そこにあり、そこに人が暮らすのが自然だと感じるようになりました。美術の授業で木のスプーンを彫ったとき、木が「もの」になる過程に、身体の中に何かガビビッと走るような衝撃を受けました。自分の手の中でつくられていくものへの希望と喜びを胸に、大学進学時に建築学科を選びました。

在学中は建築サークル「木匠塾」に所属し、精力的に活動しました。活動の場は学校を飛び出し、地元の木工所やプレカット工場、製材所、木材市場。社会で機能している現場を肌で感じることは刺激的でした。特に学内に新たな施設を立てるために伐採された樹を使った「森のたよりプロジェクト」は、企画提案から、設計、製作、管理運営まで一貫して行うことができ、大きな自信となりました。ご支援いただいた大学関係の皆様感謝しています。総勢約30名のメンバーが入れ代わりながら約20日間の製作をし、モニュメントが学内グラウンドに完成しました。この時、思いを一つに製作にあたった仲間とは今も繋がり、共に仕事をすることもあります。特に事務の全てをこなしていたのが現在の妻であり、この時か

ら志を一つに進んでゆくこととなりました。この出会いも在学時代に得た大きな成果です。

卒業後は建築士の資格を取得する目的で2年間研究生として籍を残しながら、木工所のアルバイトで技術を身に付けました。自分の目指すものづくりを仕事とすることが必要であると考え、独立への意欲が高まったころ、運よく福島県天栄村の山奥の廃校になった小学校の使い手募集を見つけました。その後中古の木工機械をもらい受け、いくらか材料も入手できました。今考えても奇跡的な流れですが、在学中の活動を通して社会に繋がり得た方々とお世話になった先生方には感謝しかありません。細々とですが途絶えることなく仕事をいただき、子供も生まれ、そうしているうちに3.11を迎えました。それ以降「ものづくりを変えることで変化を生みたい」と考え彫刻の製作を始め、研修のつもりで家族と札幌へ移りました。2年半の札幌生活を切り上げ祖父の生まれ故郷である山梨へ移動し、今に至ります。

テーブルや椅子の製作では、置く場所、雰囲気、用途などをお聞きして、図面や現場を見せていただきます。その上で、寸法、デザイン、樹種などを提案して、その空間にふさわしいもの、そこにあるべきものを心掛けて製作します。合板、金物や化学塗料などを使わず、無垢材で木組み、そして自然塗料を用います。素材の由来、構造のわかりやすさが生活における安心感につながると考えているからです。



左上：森のたより (2003)
右上：ダイニングセット
左下：昇和 (石彫刻作品)
右下：アームチェア

プロフィール

- 1979 神奈川県大和市に生まれる
 中高生時代を長野県松本市で過ごす
 2002 日本大学工学部建築学科卒業
 2004 木質注文家具製作「めばえ工舎」設立
 2014 山梨県富士川町に
 「若林克友スタナ製作所」開設

主な受賞歴

- 2003 第6回木材活用コンクール
 クリエイティブ賞「森のたより」
 2006 うつくしまふくしまものづくり大賞入賞
 2014 六花亭製菓六花ファイル第五期作品入選
 2015 個展「節展」 札幌（六花亭福住店）
 2016 「若林克友彫刻展」 山梨（ギャラリー六斎）
 2016 個展「樹をひらく」巡回
 札幌・東京・福島（聖ヶ岩ビジターセンター）

いろいろと新たな材料が出回っている現代ですが、ここにこだわりをおくことで、本来人間も自然の中にある一種の生命体に過ぎないのだ、ということに立ち返ることができるのではないかと考えています。

初めは住宅の注文家具がメインでしたが、最近では幼稚園など公共の仕事もいただいております。2015年にオープンした白河市の聖ヶ岩ビジターセンターは、設計段階から参加することで、建築と作品が一体となったものづくりになりました。4mのイチヨウの一枚板を使った受付カウンターやインフォメーションボードなど建築の躯体に組み込む造り付け家具、いすやテーブル類の家具など60品ほどを、統一したコンセプトに基づいて配置し、空間全体を作り上げることができました。

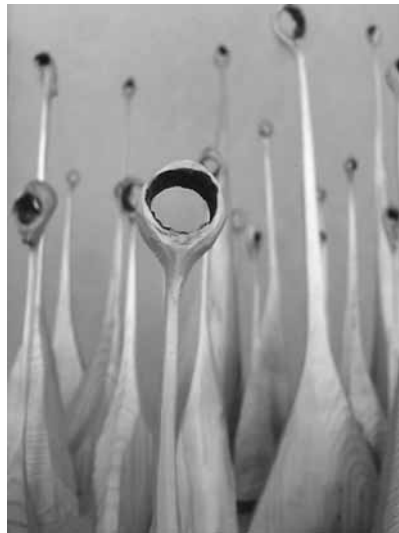
特に、ホール中央に設置した時計、「朽ちゆく時」は樹が生命としての役割を終え、木材として生きながら、物体として終わりに向かっていく時間の流れを表現する彫

刻として製作しました。これは時計としての用途を持ちながら、メッセージ性のある新たなジャンルに踏み込めたように思います。他にも、丸太を手斧（ちょうな）で彫ったベンチはアイヌの船をイメージしており、原始的なものづくりを取り込み、脚には地元の白河石を使用しました。公共空間は不特定多数の方に利用されるものであり、社会的役割も大きいので、より一層責任のある仕事であり、やりがいを感じます。

当初抱いていた、大きなものから小さなものまで、総合的なものづくりをしたいという理想。震災以降は、ものという領域を超えた「思い」、「感情」を形に込める「彫刻」がそこに加わりました。感覚として現代の人間社会の営みよりも、生命体としての営みの下に成り立つものづくりをしていたいと思っています。私の家具製作、彫刻製作はその指針の上であり、自身の生き方も同じく、その上に在りたいと思っています。



モリダマリ (2013)



残生 (2015)



聖ヶ岩ビジターセンターに収めた作品 (2015) 左：ベンチ 中：インフォメーションボードとカウンター 右：朽ちゆく時

平成28年度 博士（工学）学位論文

平成28年度は、博士後期課程に在籍するトリン タン フォン院生が博士(工学)の学位を取得された。
次にその論文要旨を掲載し、ここに祝福したい。

[[Research on Analysis Techniques for Beam Structures Using Functionally Graded Materials by Means of Finite Element Method]

(有限要素法による傾斜機能材料を用いた梁構造の解析手法に関する研究)

建築学専攻 トリン タン フォン

現在、傾斜機能材料 FGM (Functionally Graded Material) を有する部材が、スペースプレーン (有人宇宙船) の機体に多く使用されている。これは、大気圏内を長時間高速で飛行すると、機体の表面が超高温に達し、覆っている耐熱セラミックスの剥離・脱落が生じる問題に対処するためである。スペースプレーンの機体を超高温から保護するために使用されている新しい概念の耐熱材料は、断面内において、金属からセラミックスへと組成を連続的に変化させた部材である。これにより、部材の継ぎ目の問題が軽減され、従来の複合材料 (Composite) でよく見られる応力集中が生じないなど、有用な多くの特徴を持っている。この新材料は、セラミックと金属合金といった大きく異なる2つの材料相からなり、セラミックの優れた高温強度と耐クリープ性に、金属合金の高破壊靱性及び優れた耐熱衝撃性という両者の利点を合わせ持ち、界面近傍に発生する熱応力を30%以上低下させることができる。

このような部材を大規模な建築・土木構造物に適用すると、その構造物を最適な強度分布にすることができる。その結果、均質な強度を持つ建物や意図的に強度を変化させた建物の設計が可能となる。

現在、このような特性を持つ部材の解析には、フーリエ変換やラプラス変換、また、理論解が用いられているが、これらは複雑で汎用性に乏しい。そこで本研究では、一般的な有限要素法 (FEM) に傾斜機能材料を有する部材を解析できる理論式を組み込み、新しい解析手法を提案する。なお、研究の一環として、FEMを用いた梁構造を最小限の要素分割数かつ高精度な解析結果を得るための形状関数も新たに開発している。

第1章では、本論文の背景と目的を述べている。

第2章では、梁の理論に基づいて変断面梁や断面方向および軸方向FGM梁構造の定式化を行い、新しい梁の形状関数を提案している。

第3章では、有限要素法で用いるFGM梁構造の定式化について述べている。

第4章では、非線形釣合い方程式を解いて、大変形を解析する際に、共回転アプローチのみならず、円弧長制御法との組み合わせによる増分反復法を使用することで、弾塑性解析や座屈後解析が容易に行えることを示している。

第5・6章では、静的解析および動的解析における変断面梁の応用例を用いて、本研究で提案している新しい形状関数の精度を検証し、他の研究成果との比較検討を行っている。

第7章では、多スパンFGM梁構造上に移動荷重を作用させた動的問題における有効性について述べている。

第8章では、軸方向FGM梁部材からなるフレーム構造における座屈後挙動について検討を行っている。

第9章では、地盤バネ上のFGM梁構造の弾塑性解析を行い、塑性変形領域における梁部材の変形や応力について述べている。

第10章で、本研究のまとめおよび今後の将来性について述べている。

*当該論文の審査委員会は、下記の5名であった。

主査：ガン ブンタラ (日本大学工学部 教授)

副査：千葉 正裕 (日本大学工学部 教授)

浅里 和茂 (日本大学工学部 教授)

薛 松濤 (東北工業大学工学部 教授)

クアドラ カルロス (秋田県立大学 准教授)

日本大学工学部の思い出 ～郡山キャンパスでの経験を生かし、これから頑張ります。～

村上 悠



環境工学研究室では、建物の防音や遮音、ホールの音響設計など、環境工学の中でも特に建築音響工学について研究を行っています。この研究室に入ろうと思ったきっかけは、東日本大震災にあります。少しでも震災復興に携わりたいと思い、広域防災放送システムや応急仮設住宅の遮音性能に関する研究をしている環境工学研究室に入りました。

大学4年次の卒業研究では、福島県内の応急仮設住宅を訪ね、壁や床の遮音性能の測定、改善策の提案を行いました。大学院でも同テーマの研究を引き続き行い、企業から共同研究の依頼を受け、復興公営住宅、小学校、専門学校など学外施設にて測定を行い、建物の床や壁、空間の音響設計などを行いました。

大学院生活を通じて、責任感を持って物事に取り組む事の重要性を学びました。自分自身が研究室の窓口として企業や役所の方と連絡を取り合い、測定を行い、先生に助言を頂きながら考案したものが、実際の建築物として形になるからです。また卒研を指導し、求められた成果をあげる経験や、企業の方をはじめ多くの社会人の皆さんとの交流など、多くの貴重な時間を過ごすことができました。

眞船 峻

工学部のある福島で建築を学ぶとは一体どういう事なのだろうと、そんな問いに向き合ってきた4年間でした。東日本大震災を含む昨今の自然災害から大自然の恐ろしさを知り、そんな中でも建築ができることを考え、行動してきました。建築の可能性を実践した郡山駅前のみちづくり活動への参加は、その一環であり貴重な体験です。空き店舗となっていた場所を魅力的な場所にリノベーションする主旨で、設計事務所、不動産、農業と実務で活動される方々と一緒に考え、アクションを起こしてきたことは大学の外でしか得られない経験でした。

そういった学外での活動を加えながら、大学での設計課題、授業中、日常生活の中で湧き上がる疑問を紐解いて、深く自分の思考に落とし込むといった、毎日がその作業の繰り返しでした。思考は空間と時間を飛び越え、五感を通して様々なものを見て経験し、最後はかたちとして表現していました。今日食べた物も、着ている服も、蛇口から出る水も、スイッチ一つで点く灯りや空調も、私が立つこの場所の標高も、全て建築にとって切り離せません。すると何をしても無意識ではいられなく、当たり前前の日常が実は当たり前ではないのだと気が付きます。こういった気付きが、冒頭に述べた福島で建築を学ぶ意味に含まれるのではと、今は思っています。後輩の皆さんには、図面を描く際、建築に於いて意味の無い線は無いように、全ての物事に意識的になってほしいと思います。そのように考えると、デザインの種は自分の足元にあるのかもしれない。

西山 佳那

私は、都市計画第一研究室で、福島県南会津郡只見町の中心市街地活性化におけるエリアマネジメントに関する研究をしました。調査は泊まりがけで15日間行いました。調査活動では、町民の方々と交流する機会が多くありました。また、只見町の豊かな自然を生かした体験もできました。ユネスコエコパークに登録されたブナの森では、美しい川とブナの木に囲まれ、貴重な自然と触れ合うことができました。只見町には、美しい田子倉湖があり、そこではカヌーやボートを体験しました。初めての経験でしたが、町の人が親切丁寧に教えてくださり、大自然を大いに満喫しました。調査では、真面目に行う部分だけでなく、研究仲間や町民の方々と楽しく研究ができ、大学生活で一番のいい思い出となることができました。



高橋 大悟

私は住環境計画研究室の活動の一環で、数多くの貴重な経験をした。須賀川市で毎月開催されるRojimaというまちなかマーケットの運営に主催者側のボランティアとして参加し、受付での出展者への案内や駐車場で車の誘導、会場の見まわり、テント設営などを行った。与えられた仕事をこなすに当たり、自分たちがどう行動すれば効率良く事が進むかなどを考える機会が増え、回を重ねるごとに次にすべきことを臨機応変に考え、指示を待つよりも自分たちの足が先に動くようになった。特に、会場の見まわりでは、困っている人への対応や車が通る際の呼びかけなど、周囲に気を配る行動が多かったため、自然と周りを見て状況を把握する能力が身についた。

研究の一環で訪れた双葉町では、荒れてしまった現状と同時に復興の兆しが見られた。復興祈念公園周辺の計画に関する説明を頂いたときや、建設途中の海岸堤防を見たとき、復興後の双葉町の大きな未来がそこにイメージでき、建築の可能性を再認識した。双葉町の放射線量や現状も重要ではあるが、それ以上に双葉町がどう変わっていくかを考えるきっかけになった。

福島に就職する私にとって、「復興」とは一生付き合っていくこととなる。これらの経験があってこそ、福島の復興を支える人間になるという決意をより強く固められた。

平成28年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：平成29年2月13日(月) 場所：日本大学工学部 70号館6階 7066教室

1. フライアッシュ及び鉄鋼スラグを多量利用したジオポリマーモルタルの基礎性状及び耐薬品性の検討
五十嵐祐太 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
2. 原発事故による避難者の帰還に関する研究
－南相馬市小高区と葛尾村の避難指示解除準備区域を対象として－ 泉 明迪 (指導：浦部智義 准教授)
3. 全自動自己修復システム及び超弾性合金を用いた自己修復RC構造物の開発
上野 拓 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
4. 2011年東北地方太平洋沖地震による日本大学工学部1号館の振動性状変化の検討 金子真大 (指導：千葉正裕 教授)
5. ポリマーセメントモルタルの各種試験要因と調査因子の検討並びに新規用途開発
我喜屋宗満 (指導：出村克宣 教授)
6. 2011年東北地方太平洋沖地震による中層SRC建物の振動性状変化に関する研究 栗岡亮平 (指導：千葉正裕 教授)
7. 公園内における移動イスの設置方法に関する研究 ー利便性・快適性についてー
佐々木基 (指導：鈴木晃 教授, 土方吉雄 准教授)
8. 第二次世界大戦後の都市不燃化事業に関する研究
－耐火建築促進法と防災建築街区造成法下の福島県を中心に－ 清水川慶堯 (指導：速水清孝 教授)
9. 有効断面不足となるガセットプレートの耐力と補強効果に関する研究 庄司裕朗 (指導：浅里和茂 教授)
10. バサルト繊維を用いた超高強度コンクリートの基礎性状及び高温加熱時における爆裂性状に関する実験的研究
高橋広大 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
11. 1質点系モデルを用いた減衰評価に関する研究 苔米地佑大 (指導：千葉正裕 教授)
12. 進化型蟻コロニー最適化 (Evolutionary Ant Colony Optimization) の提案
原 崇太 (指導：Buntara S. GAN 教授)
13. 鉄骨置屋根形式体育館の制振補強に関する研究 星小百合 (指導：浅里和茂 教授)
14. 集成材床スラブの床衝撃音遮断性能に関する研究 村上 悠 (指導：濱田幸雄 教授)
15. 「福島県庁舎」の建築的評価に関する研究 橋本朋世 (指導：速水清孝 教授)

平成28年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：平成29年2月6日(月) 場所：日本大学工学部 70号館1階 7014教室 (五十嵐ホール)

1. 過疎地域の暮らしに関する調査研究 大木志織 (指導：浦部智義 准教授)
2. 須賀川産赤瓦に関する調査研究 糸賀成美 (指導：市岡綾子 専任講師)
3. 公園内における移動イスの設置方法に関する研究 佐藤大輔, 渡邊一樹, 高田佳和 (指導：土方吉雄 准教授)
4. 福島県内における信州高遠石工に関する研究 川本祐大 (指導：速水清孝 教授, 山岸吉弘 助教)
5. WOOD, ALCの駆動点インピーダンスに関する研究 田中靖之, 栗原操生 (指導：濱田幸雄 教授)
6. 文化財建築を対象とした火災安全性の研究 小飯塚篤哉 (指導：森山修治 教授)
7. 加齢対応住宅性能の視点からみた分譲集合住宅の実態
伊藤貴規, 田野井幸大, 石川和樹, 新屋敷堯之 (指導：鈴木 晃 教授, 宮崎 涉 助教)
8. 1質点系モデルを用いた動的測定精度の検討
石井大地, 山口達也, 渡邊拓哉 (指導：千葉正裕 教授, 日比野巧 助教)
9. LSB接合によるCLT柱脚接合部の面内曲げ実験 野崎海志郎 (指導：野内英治 准教授)
10. テンセグリティ構造の形態創生 桑原健太 (指導：Buntara S. Gan 教授)
11. 大スパン鉄骨置屋根形式建物の弾塑性挙動に関する研究 福元優作 (指導：浅里和茂 教授, 堀川真之 助教)
12. 建築用サンドイッチパネルの部分的欠損状態における防火性能への影響
小畑有莉 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
13. 竹補強ポリマーセメントモルタルの性能 ー曲げ性状及び耐衝撃性に及ぼす養生方法の影響ー
西田 電, 和田広道 (指導：出村克宣 教授, 齋藤俊克 専任講師)

平成28年度卒業設計コンクール・展示会等出展作品

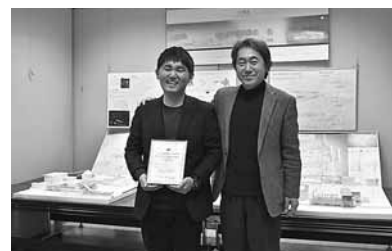
本年度の卒業設計展は、2017年2月8日(水)から10日(金)までの3日間にわたり、70号館1階7012・7013教室にて開催され34作品が出展された。常勤教員と10数名の非常勤講師も参加し、10日の午前にはポスターセッション形式で、午後には公開形式でプレゼンテーションが行われた。個人住宅の改築案から交流を主とした複合施設など単体建物の提案に留まらず、まちづくりの視点から賑わい創出を促す建築的操作を主とした作品、公共交通機関と建築との接点を意識した作品など多岐にわたる作品が展示され、活気ある質疑応答が行われた。選定された敷地は出身地周辺が多い傾向がみられ、永い時間、身近なこととして温めてきた問題を、リアルに捉えつつも、夢を描く卒業設計作品として仕上げた作品からは、雄弁にあるいは優しく語りかけられ魅力的であった。模型の大きさに頼らず、自分自身の考えを図面上に表現しようと、手書き図面やパースを多用した作品もみられ、夢中で手を動かしている制作中の姿が目に見えようであった。

2月22日(水)～24日(金)の3日間には、郡山駅前ビッグアイ6階を会場に、外部卒業設計展等への出展作品を含む全8作品による学外での卒業設計作品展を開催した。初日の午後にはJIAによる卒業作品講評会が開催され、今年度から設立された「日本建築家協会(JIA)東北支部福島地域会賞」1作品が、3時間を超える公開審査を経て選定された。出展された全作品に対する講評が行われ、参加学生たちには10名余の建築家による直接講評を聞く、実りある機会となった。

また、3月からは秋田銀行郡山南支店からの要望に応じて、ロビー空間に卒業設計作品を展示することとなった。郡山に縁の深い作品を数点展示する予定である。

外部卒業設計展示会・学外展示会等出展作品一覧

- 日本建築学会「全国大学・高専卒業設計展示会」
神子小百合(指導:浦部智義 准教授)
作品名:裏かるいさわ ー表と共存する手がかりー
- 日本建築家協会「全国学生卒業設計コンクール2017」
長谷川周平(指導:浦部智義 准教授)
作品名:保原駅・前 ー文化と生業がつくる連続体ー
- レモン画翠「第40回学生設計優秀作品展」
- 第1回日本建築家協会東北支部福島地域会賞
作山和輝(指導:浦部智義 准教授)
作品名:L I N E ー動くプラットホームー
- 近代建築「卒業制作2017」
桐井 翼(指導:渡部和生 特任教授)
作品名:未完園 ーまちのこれからを刻むー
- 日本インテリア学会「第24回卒業作品展」
佐々木浩祐(指導:浦部智義 准教授)
作品名:犬の散歩にZ軸を ーバイリンガルな建築ー
- 学外展示会出展作品(上記作品の他)
眞船 峻(指導:Buntara S.Gan 教授)
作品名:土地の楔
ー木を通した循環型システムの構造体ー
- 折笠美羽(指導:土方吉雄 准教授)
作品名:トジルヲヒラク
ーまちと人に寄り添う余白ー
- 遠藤麻衣(指導:浦部智義 准教授)
作品名:遺言ノ家
ーじいちゃん考える住宅改修の選択肢ー



平成28年度 卒業式・修了式における表彰者

平成29年 3月25日

◇齋藤賞◇

修士論文「鉄骨置屋根形式体育館の制振補強に関する研究」

星 小百合 (指導: 浅里和茂 教授)

◇北桜賞◇

修士論文「第二次世界大戦後の都市不燃化事業に関する研究

-耐火建築促進法と防災建築街区造成法下の福島県を中心に-

清水川慶堯 (指導: 速水清孝 教授)

修士論文「原発事故による避難者の帰還に関する研究

-南相馬市小高区と葛尾村の避難指示解除準備区域を対象として-

泉 明迪 (指導: 浦部智義 准教授)

◇桜建賞◇

卒業設計「土地の楔 -木を通した循環型システムの構造体-

眞船 峻 (指導: Buntara S. Gan 教授)

卒業論文「1質点系モデルを用いた動的測定精度の検討」

石井大地・山口達也・渡邊拓哉 (指導: 千葉正裕 教授, 日比野巧 助教)

卒業論文「竹補強ポリマーセメントモルタルの性能 -曲げ性状及び耐衝撃性に及ぼす養生方法の影響-

西田 電・和田広道 (指導: 出村克宣 教授, 齋藤俊克 専任講師)

卒業論文「福島県内における信州高遠石工に関する研究 -作品に見る石工と出稼ぎ先の関係性について-

川本祐大 (指導: 速水清孝 教授, 山岸吉弘 助教)

卒業論文「文化財建築を対象とした火災安全性の研究 -歴史的な大規模木造宿泊施設を対象として-

小飯塚篤哉 (指導: 森山修治 教授)

◇優等賞◇ 眞船 峻, 櫻井 繭, 渡部昌治

◇工学部長賞◇

学術・文化部門: 我喜屋宗満 2015年度日本建築学会大会 (関東) 学術講演会 材料施工委員会若手優秀発表受賞

論文名「竹補強ポリマーセメントモルタルの耐凍結融解性に関する一考察」

学術・文化部門: 神子小百合 第19回JIA東北建築学生賞 (公益社団法人日本建築家協会東北支部主催)

奨励賞・みやぎ建設技術センター賞受賞 作品名「建築のチカラ -カンショウをてがかりに-

学術・文化部門: 小嶋貴子 TOHOKU+N YOUTH DESIGN AWARD 2016 (シェルホームデザイン 株式会社ホリエ主催)

最優秀賞受賞 作品名「THE SHARE PLACE Do - mae かこみ巡り」

学術・文化部門: 渡部昌治 第20回JIA東北建築学生賞 (公益社団法人日本建築家協会東北支部主催)

東北専門新聞連盟賞受賞 作品名「宿工房 -ある人の帰還-

◇父母会賞◇

高橋歩夢, 眞船 峻

■土方准教授と土方研究室は、白河市横町通り景観まちづくり協議会より景観協定締結活動支援を依頼され、10月11日、11月29日に景観まちづくりワークショップを開催された。

■土方准教授は、10月19日、2月8日、福島県より(仮称)小名浜港湾3号ふ頭公園の基本計画及び景観計画のアドバイザーを依頼され助言された。

■パリーク准教授は、建築雑誌12月号に「グローバル化と日本の大学環境」と題する論文を寄稿された。

■土方准教授は、12月8日、福島県より第69回全国植樹祭式典会場「お野立て所」の景観アドバイザーを依頼され助言された。

■12月9日、せんだいメディアテークで行われた、日本建築家協会(JIA)東北支部・日本建築学会東北支部デザイン教育部会共催の「建築学生テクニカルセミナー」で、伊藤和輝君(渡部研・3年)が設計課題作品のプレゼン

テーション、浦部准教授がその講評を行った。

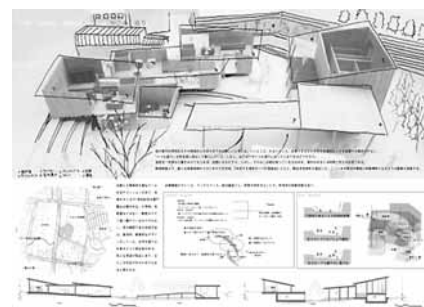
■東北6県+新潟の建築学生を対象としたデザインコンペ「TOHOKU+N YOUTH DESIGN AWARD 2016」において、小嶋貴子さん(浦部研・4年)が最優秀賞を受賞、長谷川周平君(浦部研・4年)が佳作に入選した。

教室ニュース

■長谷川周平君(浦部研・4年)、泉明迪君(浦部研・M2)、小田貴彦君(浦部研・M1)が、12月25日、キルコス国際建築設計コンペティション2016において、宮本佳明賞・佳作に入選した。

■市岡専任講師は、1月16日、白河市より白河市景観審議会専門部会委員を委嘱された。

■速水教授は、1月19日、『日本近代建築家列伝——生き続ける建築』と題す



小嶋貴子さんの作品

る著書(丸山雅子監修・共著)を鹿島出版会から刊行された。

■浅里教授は、1月27日、桑折町より新庁舎建設検討委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。

■浦部研究室は、2月11日、福島県庁にて「大学の力を活用した集落復興支援事業」に関する中間報告を行った。

■3月1日より秋田銀行郡山南支店のロビー空間に、卒業設計作品など本学科学生の作品を展示することとなった。